特選
日本銀行
総裁賞
2022

第55回「おかねの作文」コンクール

「向き合う」

新潟県・上越教育大学附属中学校　3年　井口　慶香

小学校入学と同時に、私は自分の預金口座を作ってもらった。その時、約束したのは、「生きたお金の使い方をすること」だ。生きたお金とは、命をつなぎ、誰かを幸せにし、生きがいにつながるお金のことだ。当時の私は、よく理解できないまま、とにかく使わなければいいのだと、安易に解釈した。通帳とカードを自分で管理し、暗証番号も私しか知らないことで、大人になった気分がした。ひたすら預金し、数字が大きくなることが、ただただ、私はうれしかった。

月日の経過と共に、心の片隅に不安が現れた。この正体は「どう使えばいいかわからない」「何に使うか決められない」という迷いだ。使わなければ無駄遣いなど起こらないと思っていたが、同時にそれは、考えることを放棄するということだった。使い方を熟考することなしに、生きたお金には変えられない。

時期を同じくして、私の中に、あるコンプレックスが現れた。歯並びだ。次第に人前で口を開けて笑えなくなり、気持ちが暗くなっていった。一人がいいと思うようになった。

ある時何気なく、歯列矯正について調べてみた。治療費は原則、保険診療の適用外で高額になることが多く、100万円近くに上ることもあるという。私は、自分に言い聞かせた。

「歯並びが悪くても、食べられないわけではないし、息がしにくいとか、痛いわけでもない。命にかかわることでも、ない。」

実際、機能改善の場合は医療費控除の対象になるが、美容や審美目的の場合は控除対象にはならないのだ。コロナ禍でのマスク生活では、外した時の口元の印象は、今まで以上にインパクトがある。口元を隠す時間が増えるほど、私のコンプレックスは大きくなっていった。私にとっては本当は、一大事なのだが、とにかく問題から目を逸(そ)らすようにした。「こんなことに使うのは無駄遣いだ。ただ単に見た目の問題だ。ただ単に、ただ単に。」

© 金融広報中央委員会2022

そんな折、家の電話が鳴った。伯母からだ。電話口の声がいつもと違う。伯母に癌(がん)が見つかったのだ。ステージⅣ、余命２年。すぐに治療が始まった。はっきりと物を言う伯母は私とは真逆の性格で、幼い頃から好きだった。

しばらくして伯母に会いに行った。髪の抜けた頭に、薄いネットを被っていた。私はなるべく頭の方に目をやらないように、いつも通りに振る舞まった。その時、伯母が言った。

「気をつかわないで、いいよ。ホントはね医療用のウィッグ、買おうかどうか、悩んでいるんだよね。……余命がって言われている時なのに。ウィッグなんて、無駄遣いかな。」

その表情は、今まで見たことがないほど悲しいものだった。伯母の家族が集まる場で、話題はウィッグのことになった。

「髪の毛が無くても、何も変わらないよ。」「そうそう、全然、気にならないよ。」「そんなの、要らないよ。だって、高いんでしょ。」「でも、必要かどうかは、本人にしかわからないでしょ。」「そうそう、周りが言うことじゃないでしょ。」「でも、これから治療費や生活費だってかさむんだから。」「とにかく、お金より命でしょ。」こんなやりとりを、伯母はどう思っただろうか。伯母はただ黙っていた。

後日訪ねると、そこにはボブのウィッグを付けた伯母がいた。うっすら化粧もしている。

「残りの人生、どれくらいかわかんないけど、やっぱりこうやって生きたいんだよね。」

伯母が言ったその一言が、私の心を揺さぶった。目の前に立つ伯母は、笑顔の伯母だ。私の知っている伯母だ。大好きな伯母だ。その瞬間、お金に向き合うことは、自分の生き方に向き合うことなのだと、気付かされた。

私は両親に、正直な思いを伝えた。歯列矯正をしたいこと、ずっと一人で考えてきたこと、矯正することで私はどうなりたいのかということを。そして、一つ、お願いをした。

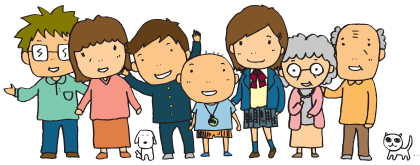
「この費用は、自分で出したい。コツコツ貯(た)めてきた、あのお金を、ここに使いたい。」

今ある預金でどこまで支払えるか、不足分をどう補うか、私は自分なりに資料も作って両親に示した。これがきっかけで、光熱費や水道代の月ごとの変化や、

© 金融広報中央委員会2022

食費の何パーセントを嗜(し)好品が占めるのか、私は生活に関わるお金を初めて細かく計算した。自分が生きるのに最低限必要なお金がどれくらいかを知り歯列矯正を実施する意味や費用についても改めて見直した。物価上昇のニュースや日本の経済成長率の推移も、私の関心事になった。

お金を何にどう使うか考えることは、自分の人生において、何を大事にするのか、どう生きたいのかを熟考することだ。そして、私個人の問題と社会の問題とは地続きで、戦争や平和、人権や食料問題は、私の問題でもあるのだ。限りある資源の分配やその方法をみんなで考えることで、社会はよりよいものになるにちがいない。身近なお金に向き合い、自分たちの未来にしっかり向き合いたい。



© 金融広報中央委員会2022